

〈令和2年度第43回ペスタロッヂ祭特別講演〉
〈令和3年3月5日〉

ゴーチエにおける芸術教育思想の特質 —— 人間形成論的側面に着目して ——

川 上 若 奈

〈令和2年度第43回ベスタロッヂ祭特別講演〉

〈令和3年3月5日〉

ゴーチエにおける芸術教育思想の特質

—— 人間形成論的側面に着目して ——

川上 若 奈

ご紹介頂きました、特任研究員の川上若奈と申します。この度は、ベスタロッヂ祭という代々続く大事な場で発表する機会をいただきまして、ありがとうございます。今日は「ゴーチエにおける芸術教育思想の特質 — 人間形成論的側面に着目して —」というタイトルで、昨年度掲出した博士論文の内容を発表いたします。

1. 問題の所在と研究方法

芸術と道德の関係について興味がありましたので、そのようなテーマで研究をしていきました。徳の部分と芸術が密接な関係にあるという思想は、西洋の美学史においてその源流に位置付けられているプラトンから現代まで受け継がれており、芸術は教育の営為にとって不可欠であるとされてきました。しかし現在の状況を見てみると、芸術や美と人間形成の要素としての道德、及び教育との目的の関係のみ認識が曖昧なまま、道德教育の教育内容が構築されていることに気付かされます。すなわち、芸術は道德や教育を目的としうるのか、あるいは両者は全く別のもので、目的が重なりあうことがないのかという関係に関する認識の問題です。

学習指導要領には道德教育の内容項目の一つとして「感動、畏敬の念」というものがありますが、このような曖昧な認識により、美しさについての学習が心の美しさにすり替えられてしまっている事につながっているのではないのでしょうか。このような問題を克服する第一歩として、芸術と道德と教育の関係に関してこれま

で検討されてこなかった新たな視点を獲得する必要があると考えました。

道德教育を主題として芸術について論じているものとして、19世紀フランスの人物デュルケムの『道德教育論』があげられます。ここでデュルケムは、芸術の教育的効果を消極的にしかみていませんでした。ここにはプラトン以来の芸術とアーティストに対する不信があり、これがデュルケムにまで引き継がれたといえます。この一方で、プラトン自身が美に対しては価値を与えていた、という思想からの系譜も存在していたといえます。教育に対する芸術の積極的役割を認めていた側の主張として、19世紀初頭には芸術の社会的あるいは道德的有用性を何よりも探求していました。その後カントを分水嶺として、クーザンは、直接的に道德に役立つように芸術作品を構想することを否定します。このような芸術が道德に役立つことに異をとねえるカントからクーザンの流れを、「芸術のための芸術」思想という、より実践的な芸術理論にまで発展させたのがゴーチエです。

しかしゴーチエの教育的側面に関する研究はこれまでなされてきませんでした。その理由は、第一に、彼が主張した「芸術のための芸術」思想というものの性格に起因していると考えられます。芸術に教育的、社会的役割をもたせることを否定し、芸術と教育とを一見切り離しているかにみえるこの思想の性格ゆえ、ゴーチエの「芸術のための芸術」思想は、これまで、芸術の教育的意義に関する議論の中でさえ検討されてきませんでした。第二の理由として、美と教育に関して体系的な著作を残さなかったことがあげられます。本研究では、ゴーチエの芸術

教育思想を人間形成論的側面に着目して、体系的に解明したいと考えました。

ゴーチエの教育思想を体系的に明らかにするにあたり、森戸辰男による芸術教育の三類型に依拠しました。森戸の研究は、教育者として「殆んど注意を拂はれてをらず、まして強調されてゐない」というウィリアム・モリスの教育思想を明らかにすることを意図しています。また、芸術教育という語は、必ずしも明確な概念ではないとして、「芸術の教化作用」、「芸術を手段とする教育」、「芸術の教育」という三つの意味が含まれると整理しました。モリスは従来、芸術家や社会批評家としてのみ捉えられてきました。加えて、森戸による芸術教育の分類は、その目的によって整理されています。このように、従来の教育との関わりの解明が等閑視されてきた人物の教育思想を検討するという目的を共にしているという点、および本研究の意図する芸術と教育の目的の整理に資するという点で、この研究に依拠することは、ゴーチエの教育思想の体系的な理解に資すると考えました。三つの中で、「芸術の教化作用」とは、「直接的・意識的な教育的目的を持たぬ場合」にも、芸術教育的な作用を反射することを指し、美術工芸運動の代表的な運動者であるモリスは、「國民の精神的生成における藝術の教化作用の重大性を強調し、生活環境の美化に思想的に實踐的に巨歩を踏出した先驅者として、即ち藝術的環境教育思想の創始者としてヨリ廣くヨリ深い見地から評價せられるべきである」としています。「芸術を手段とする教育」とは、「他のイデオロギー、例へば宗教・道德・政治上の觀念を民衆に教育する格好の手段として意識的に用ゐられる」ものです。最後の「芸術の教育」は、いわゆる芸術教育運動など、一般的に芸術教育と呼ばれるものであり、「意識的に藝術と藝術能力を教育すること」を目的とします。この目的を達成するために芸術への教育に寄ろうとするもの、芸術による教育によろうとするもの、このいずれにも偏せず両者を併用しようとするものとの三傾向があるといわれています。

2. 芸術教育思想の形成過程と基盤

第一部に、ゴーチエの芸術教育思想の背景について検討しました。

まず、ゴーチエの生涯における経験や、その時々思索をゴーチエの書簡集および彼が1867年に発表した自伝をもとにして取りあげ、彼の芸術教育思想がどのように形成されたのかを明らかにしました。ゴーチエはフランス南西部のタルブという町で生まれますが、父ピエールがパリの入市税納入所の所長に任命され、三歳の時にパリに移ります。このような地位のある父親を持つ家庭に生まれたゴーチエは、ブルジョワジーという民衆階級とは異なる道を進んでいくことになります。自伝によると、最も印象を与えられた作品は、ダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』で、「比類ない陶醉」に入り込んだ作品として、バルナルダン・ド・サンピエールの『ポールとヴィルジニー』があげられています。フランスの児童文学を研究する末松によると、子どもを教育するのに本は不必要であるとしたルソーが、ただ一つエミールに選んだ本が『ロビンソン・クルーソー』であり、子どもが夢中になるような内容であるうえ、ルソーのお墨付きとあって、その後「ロビンソナード」と呼ばれるロビンソン風の作品がドイツやスイスで次々に生まれたといえます。『ポールとヴィルジニー』は、ロビンソナードの枠で語られる傑作とされます。この二作とも文学作品の中でも高い評価を得ており、「高尚な道德的教訓」や「物悲しい道德」といった道德的な要素を多分に含み、子どもの教育に有益であるとされた作品です。子ども時代にこのような作品を後年も回想するほど熱中して読んでいったという経験が、彼の後の子どものための物語の制作に影響を及ぼすこととなります。ゴーチエは、10歳の時に寄宿制の学校に入学します。学校は「コレージュ」と呼ばれ、ブルジョワジーが通う学校でした。コレージュの寄宿舎は「監獄」と呼ばれるほど規律が厳しく、別のコレージュに転校します。「自由通学生」として通った転校先では、ラテン語詩などの教養を身につけました。また同時に、父親が家庭

教師代わりとなり指導を受けていました。彼は後の著作において、家庭教育を「全ての教育の中で最良」と表現しています。

次に、ゴーチエの絵の才能は周りの人に認められ、彼自身も画家になることを志し、学校の近くのアトリエに通います。絵に対する趣味や視覚へのこだわりはこの時期にすでに形成されていました。しかしその後、10代後半に時の大作家ヴィクトル・ユゴーに紹介され、これが文学の道に転向するきっかけとなります。文学界の重要な出来事として、「エルナニの戦い」というものをあげておきたいと思います。この時代には古典主義とロマン主義という二つの芸術派閥が対立していました。ユゴー作の戯曲「エルナニ」という作品をコメディ・フランセーズ劇場で上映するために、ロマン派の青年がこの絵の通り文字通り戦ったのが「エルナニの戦い」です。古典主義演劇の牙城であったコメディ・フランセーズは、ロマン派の勢いを食い止める「最後の砦」でもあり、客席では上演を妨害しようとする古典派と上演しようとするロマン派が闘っていました。最終的には上演は成功に終わったのであります。ここにロマン主義に決定的な勝利がもたらされたとされます。ゴーチエもこの戦いにロマン派として戦った一人でした。しかし、ロマン主義からも離れていきます。ロマン主義は、ユゴーらを筆頭に自分たちの芸術を理解できない人々のために啓蒙し導こうという態度をとるようになっていきました。「芸術のための芸術」思想の方向へと舵を切って行くことにより、進歩のための芸術、有用な文学を目指した師ユゴーらの率いるロマン主義から離れて行きました。

このような芸術思想をもとに芸術教育思想が成立するのは、彼が批評家としての仕事を担うようになったことが背景にあります。ゴーチエは作家として、芸術批評家として、長い間ジャーナリズムに携わりました。ゴーチエの批評家としての姿は先行研究によっても概ね高く評価されています。さらに晩年には、1862年に版画家のルイ・マルティネと共に「国民美術協会」の会長となりました。さらに1863年11

月に創設された「帝国特別美術学校」の管理運営主体である「高等教育評議会」の委員にも任命されました。このように美術との関わりが深く、少なからぬ社会的責任も負っていました。ゴーチエにとって2回目のサロン評、「1834年のサロン」においては、批評家を「手を引いて未知の国へと案内する」ある種の案内人に例え、見るべきものとそうでないものを熟知し、かつ的確に判断する必要があるという考えを述べています。このようにゴーチエは批評を始めたころから、優れた作品を紹介するという社会的な意義を意識して批評家の仕事に臨んでおり、このような社会的意義への認識は、彼の芸術教育思想の展開に重要な影響を持つものです。

次に、ゴーチエの芸術教育思想の基盤としての芸術観、及び教育観について検討しました。芸術家は「マイクロコスモス」、小宇宙というものを自身の内に持つべきであり、そこから自分の作品についての考えや形を引き出さなければならない、そうでないものは模倣者や贗造者でしかないと主張します。さらにそのマイクロコスモスを、芸術を通して創造すべきであるという考えももっていました。ゴーチエは自らの教育理念に基づいて学校を作り、教育実践を行った人物でもなければ、決して教育思想家として認識されている訳でもなく、先述の通り彼の教育的側面に関する研究も不十分です。そこでまず、彼の生きた時代やそこに生きる人々への眼差しはどのようなものであったか、その時代や人々がどのような問題を抱えていると考えていたのかを整理しました。そしてその問題に対してどのように考えていたのか指摘し、教育観について検討しました。まず、ゴーチエが生きた時代は、政局が安定せず、政体が何度も変わったことが特徴として挙げられます。彼が生まれたのは1811年で、その時はナポレオンの第一帝政、その後、復古王政、七月王政、第二共和政、第二帝政、第三共和政、パリ＝コミューンの壊滅まで、ゴーチエは生きていた時代に経験しました。また産業が発展し機械化が進化したことも、この時代の特徴としてあげられます。

このような時代に対して、ゴーチエはしばしば、機械化と散文的な社会を関連づけて論じ、芸術が正当に評価されない世の中への不満を述べ、退廃的な社会を嘆きます。1832年に最初の鉄道がリヨン＝サンテティエンヌ間で開通しました。ゴーチエは1837年に「鉄道」という記事の中で「鉄道は元来金物で、絵にならない」と述べています。しかし一方で、機械化のおかげで人間が解放され、結果的に詩や彫刻や絵画に満ち、美しい建築物に囲まれた世界になるという希望ももっていました。また、そこに生きる人々に対しては、芸術に対する無感動、美的感受性の低さをしばしば指摘し、芸術が正当に評価されないことが問題であると考えていました。しかしそれらの人々はそのまますべてを芸術を理解することが出来ずに一生を終えるなどとは考えず、むしろ芸術に触れさせることによって芸術を理解できる人間にしようと考えました。したがって、ゴーチエにおいて、人々と芸術とを仲介し、芸術の享受に導くのが彼の関わることのできる、人間を理想の状態へと導く人間形成と、その働きかけとしての教育の目的であり、その方法であると言えます。

3. 三類型にもとづく芸術教育思想

ここからは、森戸による芸術教育の三類型に従い、「芸術を手段とする教育」、「芸術の教育」、及び「芸術の教化作用」の三つの芸術教育の類型のそれぞれに関して、ゴーチエがどのように考え、芸術教育思想を構築していったのかに関してみていきます。

まず「芸術を手段とする教育」について明らかにするにあたり、ゴーチエが主唱者と言われ、芸術に社会的、教育的目的を担わせることを否定した「芸術のための芸術」思想に着目しました。「芸術のための芸術」思想は、カントを源としスタール夫人、バンジャマン・コンスタンや、ヴィクトル・クーザンを経由してフランスに持ち込まれ、ゴーチエが文学の原理として主唱したものとされています。『判断力批判』において展開されたカントの芸術や美に関する理論によって、目的なき合目的性という美しい

ものの規定や、美しいものは対象の有用性に基づかないという見解が、「芸術のための芸術」思想と結びつきます。カントの思想を引き継いだフィヒテやシェリングらはヴァイマルに集い、そこにドイツロマン主義をフランスに紹介したスタール夫人やバンジャマン・コンスタンが赴きました。バンジャマン・コンスタンは、ヴァイマル滞在中の日記において、シェリングの門弟であるロビンソンを通してカントの美学の思想を「芸術のための芸術」と表現しました。また、カント哲学に取り組み、大学で講義を行ったクーザンは、主著『真善美について』において、直接的に道徳に役立つように芸術作品を構想することには否定的であります。あくまで無関心的な美が魂を無限、すなわち神の方へ高めると主張します。すなわちゴーチエによって主唱される芸術論「芸術のための芸術」思想の形成にはカントやクーザンの思想が影響を与えたと考えられます。

ゴーチエ自身が「芸術のための芸術」を主唱するに至った背景とその内容を、その宣言文であるとされる『モーパン嬢』序文をとりあげて検討しました。ゴーチエが活躍していた時代には、先程申し上げましたがロマン主義と古典主義の対立があり、さらには批評家とも対立していました。批評家との対立の背景には芸術家になれなかった批評家たちのひがみや、ブルジョワ道徳との反目が挙げられます。芸術家はブルジョワ道徳を憎み、ブルジョワは芸術家の不道徳性を批判し、二者は道徳への意識をめぐって対立していました。ゴーチエは批評家たちが主張する、このブルジョワ道徳について、彼らが道徳的ではないにもかかわらず道徳を持ち上げ道徳的たれと説教するような偽善性があると批判します。一方でロマン主義も、有用な芸術を目指す立場と純粋な芸術を理念とする立場とに分裂し始めます。前者の立場に立つユゴーやラマヌティエヌらが民衆に共感し賛美する姿勢をとったのに対し、後者の立場に立つゴーチエらは前者のユゴーと芸術の有用性の点で意見を異にし、芸術の無用性を宣言することになります。このようにこの思想の背景にあるのは批評

家への批判、ブルジョワ道徳への批判、有用性への批判であり、これが中心的な主張であると言えます。また、ロマン主義と古典主義が対立していたゴーチエの時代には、美の概念が大きく分けて二つ存在していました。一つは、ギリシャ・ローマの古典文学において、完璧に表現されたとする古典主義の美であり、もう一つは、風土や時代によって固有の美があり、個別の美とするロマン主義の美です。ゴーチエは「芸術における美について」という論考の中で、美についての明確な定義は行っていませんが、「美はその絶対的な本質としては神である」という言葉を述べています。神こそが美である、という考えは、ギリシャ、ローマ古代の思想家や、その時代の思想に影響を受けた思想家たちのものであり、ゴーチエは、このような古代の、すなわち古典主義が範とした美の概念を、ロマン主義が古典主義に勝利した時代に持っていたといえます。ギリシャ、ローマ時代のプラトンは、イデア的な美、すなわち客観的な美の存在を認めていた一方で、近代の美に関する先哲、例えばカントやシラーらは、美の主観性を主張しました。ゴーチエはカント的な主観性ではなく、プラトンの客観性の立場、イデア的な美の存在を認める立場をとっていました。

次に、ゴーチエが教訓的な作品に対してどのように批判していたのかについて、「アングル評」、及び「ホガース評」をとりあげて明らかにしました。1858年の「アングル氏に関して」においては、芸術と道徳との関係について、芸術作品は正確に学説や規則や格言を含んでいる必要はなく、教義を立てるため、教示するために作られるものではないとされ、そのようなものを作る者は芸術家ではないと言います。1864年に書かれた、ウィリアム・ホガースの作品「放蕩一代記」についての批評文においては、品の美や優雅さに魅力を追求せず、むしろ美を犠牲にして道徳を宣言するようなモラリストの画家であるという点でホガースを批判し、芸術とは従属的に道徳的真理を表現するものでも、直接的で実際の有用性を持つものでもな

いとします。

次に、「芸術のための芸術」が否定する、道徳的な有用性の道徳とは、偽善的な道徳であるということに関連して、ゴーチエの偽善に対する考えを「ボードレール評」をとりあげて明らかにしました。ボードレールの代表作である『悪の華』という作品は、公序良俗と宗教道徳に背いた罪で、有罪判決を受けました。これに関連し、ゴーチエは、ボードレールの作品を不道徳的であると非難する批評家は、かえって偽善的で無知で不誠実な、すなわち、不道徳的な言葉で彼を非難していると言います。美の感情をもたらすことのみを目的としている作品は、どんな教義も説かず、どんな解決策も示さず、忠告することもないため、そもそも道徳も不道徳も生まれません。それにもかかわらず、作品に教化することや、有用であることを求める批評家が、作品の不道徳さを攻撃する際に道徳を盾とすることこそが偽善なのであり、これが世の中にはびこっているとゴーチエは考えました。

以上の検討により、ゴーチエの「芸術を手段とする教育」という意味での芸術教育思想における芸術と道徳と教育の関係について、「芸術のための芸術」は、「芸術」は「道徳」や「教育」を直接的な目的としてはならないという思想であったとまとめることができます。

次に、「芸術の教育」に関するゴーチエの思想に移ります。ここでは、『家庭博物館』誌という雑誌と、その雑誌へのゴーチエの寄稿作品に着目しました。この時代には、両親とも仕事に追われ、労働者階級の家庭教育の不備が指摘されていました。そのような中で、1830年代には、初等教育に関する法律が制定され、それに伴い、子ども向けの定期刊行物も盛んに出版されるようになりました。一方で、19世紀前半から中葉のフランスにおいては、近代家族を形成するブルジョワジーと、その下層に位置する労働者階級との別がありました。この中で、新聞の回読や民衆図書館といった方法で、民衆が書物に触れる機会があったものの、その恩恵にあずかることさえも時間的、金銭的に困難な貧民は存在したと考えられます。このような状

況の中で、1833年に、エミール・ド・ジラルダンらによって、文学を民衆のものにする、すなわち、精神の喜びによって道徳的改良を達成することを目的として、『家庭博物館』誌が創刊されました。『家庭博物館』誌の特徴の一つとして、多岐にわたる分野の豊富な内容が含まれるということがあげられます。雑誌には、宗教、文芸、科学と芸術、歴史や地理、法律などが内容に含まれていました。また、文章だけでなく、目に訴えかける内容が充実しています。この雑誌の出版方針は、貧困に由来する犯罪や飲酒などの悪習、そして貧困は労働者の無思慮、怠惰などの道徳的原因にあるといわれるという負の連鎖、さらに、子どもの手本になるべき近くの大人が、道徳的に墮落した生活を送っており、子どもがそれを真似るといふ、いわば、二重の負の連鎖からの脱却を目指して叫ばれた道徳教育の要請に応えるものでした。これに加え、民衆のために道徳的に適切な本を選び、かつ、作らねばならないという風潮の中で、『家庭博物館』誌は、文学を民衆のもとに届け、それによって道徳的改良を達成しようとしており、その文学として政治や科学からは独立し、教育的、道徳的に有用であるものが想定されていた点も着目に値します。

次に、『家庭博物館』誌へのゴーチエの全寄稿作品を概観し、その中でも、雑誌の方針に添い、道徳的改良を達成するものである「羊飼いな」と、道徳の学習という項目名が唯一明記されていた「少女の枕」を取り上げ、この二つの作品がどのように読者の道徳性を養おうとしていたのか検討しました。まず「羊飼いな」というのは、幼いピエールと呼ばれる、15、16歳の夢見がちな羊飼いが、絵の勉強を続け、理想の女性と結婚し、偉大な風景画家になるという結末をむかえます。この作品は、「慢心をもつな」、「純粋な情熱とたゆみない努力が成功に導く」、「粘り強い努力は報われる」といふ、読者の子どもへの教訓が含まれており、物語を通して、彼らに教訓を与えることを意図していたといえます。「少女の枕」は、主人公の少女ニネットが、自分の行いを諫めてくれる魔法の枕を手に入れ

れ、枕の言葉に従って、幸せな人生を手に入れるという物語です。「未来に欲することは、今を台無しにする最も確かな方法なのですよ」、「働き、祈る者とは、恵みを与え、自分自身のため、そして最も愛する者のために祈る者のことです」、「心からくるものは、心に響くものなのです」、「純粋な生活態度や、本物の自然の幸せに添えられたたゆみない仕事は、名前を有名にしないはずがない」といふ四つの教訓が、枕の言葉として啓示されます。以上より「羊飼いな」および、「少女の枕」は、物語に教訓が明示的に含まれることから、ゴーチエは物語を通して子どもたちに教訓を与えることを意図しており、『家庭博物館』誌の道徳的改良を達成するという方針に沿ったものであるということができます。そして、二つの作品に含まれる教訓から、情熱や愛情をもって、たゆみない努力をすることが、成功へと導くということを伝えようという道徳教育観をもっていたといえます。教訓を含んだ物語によって、家庭における芸術の教育を行うというのが、ゴーチエのここでの思想であるということができます。

家庭教育そして子ども向けの文学を提供するにあたり、ゴーチエの主唱した「芸術のための芸術」思想にみられるような芸術へのこだわりは、どのように彼の寄稿作品に表されているのでしょうか。言い換えれば、「芸術のための芸術」思想において主張される、美の追求という芸術の不可欠な性質、すなわち、芸術性はどのように担保されているのでしょうか。ここで、彼の寄稿作品の中で、唯一「道徳の学習」という項目名が明記された作品、すなわち「少女の枕」に着目し、この作品が収められた『家庭博物館』誌第12巻に、同じく「道徳の学習」として掲載された11編の文章との比較を通して、芸術性に関するゴーチエの作品の特質を、他の文章と比較することによって浮かび上がらせようと考えました。ゴーチエの作品には、色の描写に関して三つの特質があると言えます。第一にゴーチエの作品では、他の作家の作品よりも色を表す言葉が多く使われているということです。色の描写が豊富なゴーチエの作品は、色を

自分で想像できるまで想像力の発達していない子どもたちにとって、読んでいて楽しく、想像力を刺激されるものであるといえます。第二に、人物や物体の描写だけでなく、情景描写においても色彩豊かに記述されているという特質です。他の作家の作品における色を表す表現は、そのほとんどが人物や物体の特徴を叙述するためだけのものです。たとえば、「黒くやせこけてつやのある顔」、「白い歯」、「緑色の鎧戸のついた白い小さな家」などというようにです。それに対し、「少女の枕」は多くの色を用いた情景描写が含まれます。情景描写は人物、物体描写と異なり、空間的広がりを読者に想像させることができます。そして読者が作品の中に身を投じることができるのは、その空間的広がりの中であり、空間的広がりを具体的に色鮮やかに想像する事によって、より鮮明に自分が物語の中にいるように感じられるのではないのでしょうか。第三に、単なる赤色、青色というような描写だけでなく、色の対比や比喩的な色の使い方をしているという特質です。例えば、「彼女は黒いサテンのドレスを着て、飾りとしてサンゴの耳飾りとプレスレットを身につけていた。これらの大いに秘教的な二つの色のコントラストは、彼女の超自然的な性質をより一層際立たせるのに役立っていた」というような表現です。読者が色のコントラストを想像して頭の中で描く世界は、単色で色づけられる世界よりも美しいでしょう。また、比喩を用いた色の描写は、より具体的に情景を想像させることができるうえ、比喩に用いられるものと比喩されるものとの組み合わせの秀逸さで、読者を楽しませることができます。このように、色のコントラストの描写や色の比喩表現に、ゴッテの作品を文学たらしめる美しさへのこだわりがみとれました。この点において、彼の芸術性が担保されていると言えます。

しかしながら、「芸術の教育」として、芸術性を担保した文学作品を提供したとは言えども、明示的にせよ暗示的にせよ、教訓を含ませていたことは、先に検討した彼の「芸術のための芸術」思想に反すると言わざるを得ません。

彼自身の信条へ反する形で、このような作品を寄稿した理由としては、金銭という現実的な問題が関係していると考えられます。作家にとって、金が稼げる新聞、雑誌への寄稿は生活の命綱でした。ジャーナリズムでの世界で作品を発表すること、また、その雑誌の出版方針に合致させ、教訓を含んだ作品を発表すること、しかしその中で、描写の豊かさに物語を文学作品たらしめる彼の芸術へのこだわりを入れ込んだことは、家族を養うために金を稼ぐ必要性と、「芸術のための芸術」の主唱者としての矜持との攻防の結果であると言えます。

以上の検討により、ゴッテの「芸術の教育」という意味での芸術教育思想における芸術と道徳と教育の関係は以下のようにまとめられます。すなわち、『家庭博物館』誌の「教育」は、この雑誌を人々に届け、芸術、この場合文学を広めることであり、「芸術」を直接的な目的とします。加えて、副次的に読者の道徳的改良を達成することが目指され、「道徳」を間接的な目的とします。ただし、ゴッテの寄稿作品は、読者に教訓を与える芸術であることにより、道徳教育が直接的な目的となってしまっています。

三類型の最後、「芸術の教化作用」に関する思想について検討します。芸術を人々の間に浸透させようとする動きは、社会教育の一環として19世紀以前から存在しました。フランス革命後、国有化された王室や貴族、教会が所有していた美術品の保存や展示の場所として、またナポレオン戦争の戦利品を集めた場所として、美術館が発展しました。また、サロン展と呼ばれる展覧会も行われていました。サロン展は商品と化した美術品の見本市のようになっており、その美術品蒐集の指標として美術批評が求められました。また、応用芸術というのもこの時期に発展しました。彼が最初にサロン評、つまりサロン展の批評文を書いたのは1833年で、そこから亡くなる年の1872年まで、2回を除き31回のサロン展について批評文を執筆しました。1834年のサロン評では、「我々の批評文は欠点をあげつらうのではなくて美しさを目立たせる」ということが書かれています。次に

ゴッテの応用芸術論を検討し、芸術の人々の間への普及に関して見ていきます。彼は1836年の応用芸術論の中で、このように述べています。「芸術家が可能なすべての応用の外に引きこもることは間違っている。」彼は、可能なすべての応用を考えないでいることは間違っている、と主張します。人々の芸術への嗜好を広める可能性を示し、そのための方策として芸術家が 대중と交わる、すなわち、芸術が人々の手に届くようにすることが必要であるとしています。芸術家が用途をもった芸術を制作し、人々の間に芸術を浸透させることが必要であると主張します。芸術はすべてに対しての有用性を否定しているわけではなく、美や美しさに関しての有用性は認められています。用途をもった芸術は、用いられることによってその美しさを広め、嗜好を涵養することが求められています。したがって、このような用途をもった芸術を制作すべきであるという主張と、「芸術のための芸術思想」は矛盾しないと言えます。

最後に『アーティスト』誌という雑誌について検討しました。ゴッテは1856年12月にこの雑誌の首席編集者となりました。その時の序言の中で、このように語っています。すなわち、人々に芸術作品の展示情報などを提供し、実際に見られない人々のためには作品を詳細に描写することにより、人々により多くの芸術作品に触れさせようとしてきました。加えて『アーティスト』誌には毎回、付録として版画が付いてきました。『アーティスト』誌における図版の付録は、遠くにある作品や失われた作品、あるいは破壊された作品を人々の身近に置くことができ、名作を保全するとともに、それらの名作を人々に普及させるという効果をもたらします。

以上の検討により、ゴッテの「芸術の教化作用」という意味での芸術教育思想における芸術と教育と道徳の関係について、芸術と人々を仲介するという「教育」の営みによって、人々の「芸術」への嗜好を育むことができるとまとめることができます。

4. ゴッテにおける芸術教育思想の特質

結論に移ります。これまで検討してきたゴッテの芸術教育思想について、「芸術を手段とする教育」では、「芸術」は「教育」や「道徳」を目的とすることを否定していました。次に検討した「芸術の教育」では、「芸術」が「道徳」を目的としてしまっていました。最後に検討した「芸術の教化作用」という意味でのゴッテの芸術教育思想における芸術と教育の関係では、芸術と人々を仲介するという「教育」の営みによって人々の芸術への嗜好を育むことができるとしていました。以上述べてきたように、芸術教育の三類型の中で、「芸術を手段とする教育」は、「芸術のための芸術」思想が否定するものであり、「芸術の教育」としての文学教育においては、芸術性を担保しつつも子ども向けの作品に教訓を含みこむことによって、「芸術のための芸術」思想と矛盾してしまいます。したがって、「芸術の教化作用」という意味において、「芸術のための芸術」思想と矛盾せずに芸術と教育とを結びつけることが可能となります。

それではなぜ「教化作用」を持つのか、また、「芸術の教化作用」という意味において、芸術と教育と道徳はどのように結びつくのでしょうか。それは芸術に魂を高めるという効果があるためであり、芸術及び教育と道徳はこのような効果によって結びつきます。先に紹介したクーザンも、直接的に道徳に役立つように芸術作品を構想することには否定的であり、あくまで無関心的な美が魂を無限、すなわち神の方向へと高めると主張するように、ゴッテもまた、役に立つことを追求しない純粋な芸術は、魂を高めると主張します。ゴッテはこのように語っています。「芸術の目的は美の観念を生み出すことであり、その本質そのものによって人間の本性を向上させる」、「芸術は美しさの純粋な感覚を魂に与え、魂を物質的な喜びから引き離し、魂を多かれ少なかれ理想に近づけることによって、魂を高める」という言葉です。

5. 研究の成果と総括

したがって、芸術や美と人間形成の要素としての道徳及び教育との目的の関係の認識が曖昧になっているという問題に対して、ゴーチエの芸術教育思想は、以下のような回答を与えてくれます。すなわち、美を追求する芸術は、道徳を直接的な目的としない限りにおいて、かえって魂、言い換えれば人間の本性を高めるという点で道徳と密接に関係します。人々と芸術を仲介するという働きかけを通して、芸術の美によって人間の本性を理想に導くという思想が、ゴーチエにおける人間形成論であると言えます。

最初に述べた通り、19世紀フランスの教育の潮流はゴーチエとは別の対立をする方向で流れていきます。一方でゴーチエは、「芸術の教化作用」という意味での芸術の教育的意義を肯定し、自ら人々と芸術の仲介者として芸術教育を推進していきました。彼の芸術教育思想によると、芸術は人々の役に立つことではなく、あくまで美そのものを追求しながらも、そのような真の芸術に内在する性質によって教育的効果を持ちます。その意味で自律的な芸術がかえってその性格により教育に対して効果をもつ、というカントを分水嶺としてシラー、フランスではクーザーへと引き継がれていった芸術教育思想の流れの中に、その実践的な理論を提起した人物として彼を位置づけることが可能であると言えます（図1）。

博論後の研究では、教育に対する芸術の積極的役割について、その思想や実践がどのように

展開されていったのかについて明らかにしていきたいと考えています。これで発表を終わりにします。ありがとうございました。

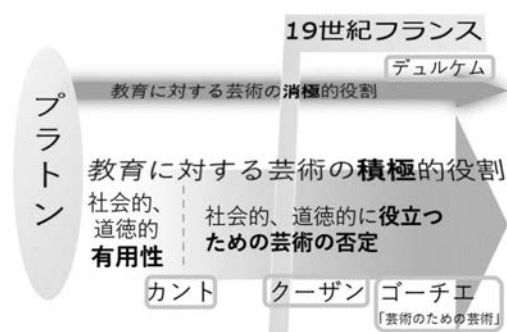


図1 芸術教育思想の流れとゴーチエ